
神殺し～優しい殺神鬼～

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺し〜優しい殺神鬼〜

【Nコード】

N7955X

【作者名】

廻

【あらすじ】

近衛一族——大昔にとある宣託を受け、呪われてしまった一族。そこに生まれた、鬼子、近衛無音。彼は十七年間、何度も死にかけながら、鍛錬を続けた。神を、殺す為に。——そんな彼は、かけがえないものを失い、かけがえのないことを知った。だけど、それはもう遅く、気づくには遅く……。※直球で言います。最強モノです。

終わった死と、始まった生（前書き）

目指せ、お気に入り件数十件！！
そんなお話です。

終わった死と、始まった生

「――僕は、無力だ」

神と呼ばれる存在がいた。

大昔に、僕の一族にとある宣託が授けられた。

異界の神が、現世に現れ、世界を喰らい尽くすと。

その神を殺すために仕上げられた。神を殺す為だけに、愛の無い性交によって産み落とされた僕。神を殺す為のみに、この世に存在を許された僕。

食事をするのも、家に住むのも、服を着るのも、息をするのも、勉強をするのも、鍛錬をするのも、歩くのも走るのも、考えることも――こうやって、生きていることでさえ、神を殺す為だった――はずなのに。

「にい、さま……」

「――――かずね――一音」

苦しかった。辛かった。泣きたかった。

肉体を強化するために、定期的に体の細胞を破壊する術式は毎日、僕の心身をすり減らしていった。

食事には、いつも致死量ギリギリの秘伝の毒薬が混ぜられ、食べるたびに血を吐き、体を痙攣させ、意識を混濁させた。

——一日のノルマを達成できねば、妹を殺すと脅された。——実の、父親から。

会えるのは、一週間の内一日だけで。だけど、だけど、それを、会えることを思えば、父上からの拷問とも取れる鍛錬にも耐えることが出来た。

妹は、僕の母上がいつまでも次子を孕まなかったため、次候補の女性との間に生まれた、腹違いの少女だ。

男子は神殺し。

女子は神封じ。

二人一組。二人で一人。二つで一つ。
神と戦う。神を殺す。

十七年間。僕は神と戦う、神を殺す術を身につけるために、殺されかけた。幾度となく、際限なく、終わりなどないかのように。

十七年後の十二月二十五日。世間ではクリスマスというキリストの誕生日。雪が降るその夜。

僕の一族——近衛家が殺すことになる、異界の神。フガクが、その姿を現した。

雄叫びを上げながら、次元を切り裂き、純白の鬼のような姿をし、理性を失ったフガクが、顕現した。

戦いは七日ほど——だったと思う。

除夜の鐘が鳴り響くのが、いくつもの山の向こう側から、遠く遠く

く、聞こえたから。

しんしんと降り積もった純白の雪が、真紅の血によって、赤黒く染め上げられていた。周りの山々はいくつもその背を低くし、地盤そのものが崩壊していた。

だが。

勝った。フガクの体から発せられる神々しい光が消え、純白の鬼のような姿はしばみ、人の体となって地に伏している。

「一音……一音ッ」

「に、い、さまあ……」

一撃を、必殺を、山をも大地をも吹き飛ばす一撃必殺を、一音がもらった。深い黒の長髪が血に塗れた。腹に穴が、向こう側が見えるほどの穴が、開いた。

「にいさま……無音にい、さま」

「……一音、なんで、……なんで僕を」

止めを刺そうとしたそのとき、フガクが理性を失った最後の一撃を放ってきた。夜の闇を照らす、光の槍だった。

僕は、僕は、構わず突進した。黒刀を構えたまま。まっすぐに、脇目も振らず、真っ直ぐに、これで終わらせるための、最短距離を突き進むために——真っ直ぐに。

僕と、フガクの間。

横から一音が飛び込んできて、結界を張った。
僕と、フガクの間に。

結界は、数秒ともたず、穴をあけてそのまま一音の腹も貫き通した。

僕はフガクに突進していた。体を止めることなく、神を殺すほどの威力を持った黒刀で、フガクを斬り伏せた。

「なん、で……………」

「わたくし、は…………にいさまの、ことが…………大好き、ですから」

「なんッ!？」

どの道、こうなるのか。

倒れ伏せたフガクの指から、一条の光が伸びるのに、全く気付かなかった。いや、むしろ、気付いていたとしても避けなかったかもしれない。だって、それは——同じだから。

僕の心臓ごと、胸がごっそり消え去った。

「にいッ!？」

ゆっくりと、一音の上に覆いかぶさった。なるべく、衝撃を与えないように。多分、もう痛みすら麻痺しているとは思う、その小さな体に。

「……………一緒だ。一緒なんだ、一音。僕も——大好き、なんだ」

そつと、耳元で囁いた。視覚すらもほとんど失われている一音には、聴覚の実が唯一の情報源だったから。せめて、安心して、逝かせてあげたいんだ。

最後の最後で、この立派な妹の、兄らしく。

小さな、それは小さなと形容していい声だ。いや、声とは形容するのは、少しだけ憚られる、そんな音が、彼女の口から漏れた。ぼそり、ぼそりと、一文字ずつ区切られるその音を、耳を寄せて必死に聞いた。

五音。たったの五音の音を発するのに、一分の時間を要した。

『ありがとう』

そんな『言葉』を伝えて、守るべき彼女は、ゆっくりと、心臓の動きを弱めて行く。

「……………ああ」

僕は、体を仰向けにした。妹と体が並ぶように。

ぎしぎしと、雪が僕の体重で押し固められるのが分かる。彼女のか細くて浅い息が、どんどん弱くなっていくのを感じながら、空を体全体で見上げた。

「一音……………雪って言うのは、なんだか、綺麗なもんだ、な」

指の先から、どんどん温かみが消えて行くのが分かる。
動かなくなる前に、一音の頭を包み込んだ。

「……………ハッピーバースデー、かずね」

喉の奥から、多量の血液がせり上がってきた。
無意味にもかけた法術がとけてきたみたいだ。
口の中で血が泡立つのを感じる。息が、し辛い。

「は、はは、……おやすみ」

僕は、妹の冷たくなっていく体を抱きしめたまま、ゆっくりと目を閉じた。

最後に聞こえたのは、何かが、雪を踏みしめている、音だった。



神は、基本的に死なない。

神が死ぬ時、それは、誰からも忘れ去られたときだ。誰の記憶にも留められず、畏怖の念を得られない神は、自然に消滅する。

フガクもまた、そうだ。

その存在を支える存在は、この世界ではなく、遠く離れた異世界にある。

彼としては、自分が何をしているのか分からなかったものの、自分が何をしでかしていたのかぐらいは分かっていた。

理性を失い、次元を切り裂き、そのせいで本来はあってはならな

い多くの人間を因果という鎖に縛り付けてきたのだ。

目の前に転がっている、二つの若人も。

まだ、命は潰えてはいない。伊達ではなく、この二人は暴走した彼の力を上回った。世界を滅ぼす、その力を。

だが、少女の方の命は、もう尽きかかっていた。

そう思った時にはもう、彼女の命の灯は、完全にこの世界から離れてしまった。こうなれば、もうなにをすることが出来るわけでもない。

何故、自分が理性を飛ばしていたのかは分からない。誰かの陰謀だったのかもしれないし、もしかしたらふとした拍子に飛んでしまったのかもしれない。

だったら、この惨劇の、数百年に渡る悲劇の責任は自分にある。誰かの陰謀だったとしても、誰かの策略だったとしても、それにかかってしまった自分の所為だし、ふとした拍子なんかはなおさらだ。

彼は、異界の神だ。

この世界では充分に力を振るえない。神ではなく、化物として、理を統べる存在ではなく、力を振るうだけの存在としてしかいられない。

ならば、この少年を自らの世界に。

自らの世界に呼ぶことによって、新たな生活を、新たな人生を送ってもらう。

しかし、何分我が身は転生などが出来るほどの神格は持ち合わせてはいない。ゼロからのスタートなどムリだ。

それはもう、どうしようもない。

だからこそ、彼の世界で、彼の力を存分に振るい、少年を生きながらえさせ、新たな生活を、人生を送ってもらう。

あの世界に送ってしまったら他の神々がいるので、治療以外は手出しは出来ないが、今この時を見捨てるよりはマシだろう。

神だから人の気持ちが分からないなど、そこまで高慢になったつもりはない。

だから、足元で転がる、この若人を生きながらえさせたいと願うのも、なんら不思議なことではないのだ。

少年に向けて、光り輝く指を振った。

空間が裂け、次元が裂け、異世界への扉が現れる。

少年を担ぎあげ、その扉へと勢いよく足を踏み入れた。そこには何の躊躇もなく、ただ、前へと進むのみだった。

「――『フル』へ」

数秒後。膨大な爆音とともに、異界へとつながる扉は閉じた。その衝撃で巻き起こった巨大な雪崩によって、この場で起こったすべての事柄が埋め尽くされた。少女の抜け殻の体も、全て――。

残ったのは、純白の雪だけであった。



暖かな木漏れ日が差し込む木陰に、一人の少年が腰を木にかけ休んでいた。この場合は休んでいたというより、寝ていたと表現した方がいいかもしれない。

現に、少年は健やかな寝息を規則正しく漏らしながら、『胸』や『腹』を上下させているのだから。

そんな木の上で、青い雛鳥が甲高く、それで耳心地の良いさえずりをした。

「……ん、んん」

体を動かしたのは、黒髪の見目麗しい少年だった。さらさらとした黒髪を、気をゆつくりと撫でる風に揺らしながら、その瞼を開けた。瞼の奥には、紅い瞳があり、その紅い瞳は周囲を数回見回すのだった。

「……ここが、極楽か？」

手を握り、息を吸い込み、手を開き、息を吐きだす。

父親から施されていた細胞破壊の術式も解けていて、体の調子もすこぶるいい。むしろ、羽のような軽さの所為で、逆にどこか悪いのではないかと思うほどだった。

「極楽、にしては、仏も観音様もおられない。ここは、どこなのだろう？」

とりあえず、座ったまま周りを見回した。

小高い丘、だろうか。周囲に広がる森林を見渡せるということとは、幾分か周りより高い位置にあるということだろう。なので、小高い丘という表現は間違っていないはずだ。

「それにしても……日本に、こんなところはあっただろうか？ 無かったような気がするけど……」

そういえば、だが。極楽には所持品がついてくるのだろうか？
腰には、鞘に納められた黒刀が差されている。極楽にこんなものを持ち込むとは、なんて不躰なのだろう、と無音は若干顔を赤らめた。

「……極楽では、ないよなあ」

極楽といえば真っ先に思いつくのが『蜘蛛の糸』なのだが、そんな彼の思考パターンからすると、森がただただ広がる場所を極楽だとは思えないらしい。

「……一音は、いない、か」

法力を練り、法術を発動する。法術といっても大したものではなく、周囲五百メートルの物体を探る程度のもだったが、充分だった。

周りに小動物などはいるが——愛しい妹の姿が、どこにもない。

「まだ、温かい、な」

最後に一音を抱きしめた腕が、まだ、彼女のぬくもりが仄かに残

されている。

何故、自分一人が、このような場所に来てしまったのだろうか、後悔する。出来るならば、死後は妹のそばにいてやりたかったというのに。彼女の願いを叶えてあげたかったというのに。

どこの誰かは知らないが――随分と余計なことをしてくれたものだと、そう思う。

だが、余計なことはしてくれたが、この命、妹が命を懸けて守ったこの命――余計なところなど、一つもありはしない。どころか、身に余る命だと、矛盾した考えさえ浮かんでしまう。

「……『生きる』とするか」

あの世界では、妹との時間以外、生きているという実感が持てなかった。全部が全部、末端から先端までが、培養機の中で育てられた、いずれ壊れると分かっている予定調和に支配されている気がして、ならなかった。

その予感は大方向だった。当たったところで、それを回避するだけの力が自分には無かったのだが。妹が死に、自分も死にかけた。なまじ、体の鍛え方の違いだったのかもしれない、そう思う。

死ぬだとか生きるだとか、そんなことはどうでもよかったのかもしれない。あの世界では、生と死の境界線をあやふやにしていなければ、一つの区切りに囚われて、あつという間にその身を散らすのだ。

――兄のように。

「生きるといっても、何をすればいいのか見当もつかないけど……」

小難しく考えるのは、自分の悪い癖だと、そう思う。
シンプルに考えよう。

心臓が動いていれば、生きている。

それ以上でもそれ以下でもない。心臓が止まれば、人間は死ぬのだし、逆に心臓が動いていれば人間は生きているのだ。

当面の目標は、心臓を止めないこと。

外敵からはもちろんのこと、自分でも止めないようにしなければと、決意を固める。

「まあ、ボチボチ生きて行くさ。もしかしたら、本当にご都合主義かも知れないけど、一音の生まれ変わりとかに会えるかもしれないし。……希望を持っても、いいんだよな」

座ったまま、地面を見下ろした。柔らかな緑草が木漏れ日に照らされ、ぴかぴかと陽気に光る。

そのどこにでもある草の上に——どこにもない、一滴の水が、滴り落ちた。

「——さようなら、一音」

彼の腕から、一音の残骸が、消え去った。

終わった死と、始まった生（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております

第一話：確認と説明と――邂逅と（前書き）

人類を発見しました。今から接触を試みます。

第一話：確認と説明と——邂逅と

「異界に来てしまった、というわけか」

そんなことをぼやく無音。その息には乱れなどなく、平常心そのものと言った様子で、少し浮かれ気分のステップの様なものを取りながら――

――双頭の巨怪鳥を相手取っていた。その姿は禍々しい黒い羽根に覆われていて、鋭く伸びた嘴が地面を穿っていく。

ようするに、双頭の鴉だ。

こんな生物は地球上にいなかったし、もしいたとしたら人間は繁栄できなかっただろう。

「クワァァァアッ！」

しかし、鳥だ。鳥である。どんなに凶体を大きくしようとも、鳥であることに変わりはない。有り体に言えば、食料としての鶏肉程度が存在だ。

だがしかし、無音には一つか二つほど心配ごとがある。

それはこの世界に存在するためにはとても重要なことで、もし駄目だとしたら、食料や水を一口でも口にすれば死んでしまう……だろう。

それは、細菌などの極小生物の存在が第一に来る。地球上の生物

はそれら極々小さな生物たちと共存しえていた。上手く上手く。もし、地球上に地球外生命体がやってきたとしても、食事などはすることが出来ない。

……………まあ、煮るなり焼くなりすればよいだけなのだろうが。

「クワァ！」

「クワァ！」

二つの頭が、二つの嘴が、同時に無音の頭を狙い、地面を穿つその一撃が振り下ろされた。当たれば、熟し切った果実さながら、目にもとめたくないスプラッターになるであろうその一撃を――

――両手で掴んだ。

ズンッ！！ と、無音の両足が地面を陥没させる。

「ッ！ クッ！」

「ッ！ ……ア！」

嘴を握りしめられ、上手くさえずりを上げられなくなった双頭の鴉。

そんな異形の生物を、少し憤怒を混ぜたような表情で睨みつける。
トリハダが立つのを感じる一羽にして二羽の巨怪鳥。

「考え事してるんだから、少し黙れ」

それをおこなった当の本人は、涼しい顔でそう言った。

そして、何かに気付いたように、ハッ！ とした表情になると、無表情に体を震わせる双頭の鴉を見やると、

「そうだな……………羽を筆らないと、喰えないか」

双頭の鴉の血の気がサアッと引いたのが分かる。いや、これから分かるように羽を筆っていくのだが。

握った双頭の鴉の嘴——顔面も含める——を地面に突き刺す。めり込ませるといふ表現も可能だ。

体の強度は高いらしく、その程度では潰れなかったがもはやピクリとも動かなくなったその体。脳震盪か何かでも起こしたのだろう。脳が二つあるので振動も二倍だ。

「ふ……………ちゃっちゃと、解体しますかね」

そういうと、腰に差していた黒刀を手取る。

法力、というモノがある。それは、一般に気だとか言われるもので、実際もそんなモノだ。

この黒刀は、大雑把に言うと、法力を込めると威力がアップする漫画とかでよくある刀である。その威力をのぞいて、だが。

無音は、黒刀を振り下ろした。

それはとてつもない威力で——詳しく説明するのも億劫なので省くが、ようするに、でっかい鴉ごと、大地も切り裂いたということだ。



「ちそうさま」

そう言いながら両手を合わせる無音。彼の前には三メートルほどの生物の骨と、葉っぱの上に置かれた多少の肉がある。どうやら、葉の上にあるの以外は食べたみたいだ。

彼の体積より食べた体積の方がどう見ても多い、なんて野暮なこととは言わないでおこう。

「この肉は、どうしようかな。干し肉にするのが、いいかな」

しかし、こんなところに何日も居たいわけではない。どちらかというと、早くこの世界に人間がいることを確認したいと思っているのだ。

なので、手っ取り早く水分を奪う方法として、法術がある。

水分を奪うには乾燥させればいい。それならば火で炙るなりすればいい。

これをする wait しているのは干し肉ではなく焦げ肉だ。いかに毒薬を常時摂取していた無音だとしても、こだわれるのなら味にもこだわりたい。

ようするに、水分を奪いたいのなら、水进行操作すればいいだけのことなのだ。

「水よ。こい」

みずみずしかった鶏肉が一瞬でミイラのように乾いてしまう。法術とは、呼びかける『対象』と、呼びかけた『命令』が一致していれば発動する。逆に、『炎よ。腐れ』などの意味不明な『命令』は

発動しない。

そして、言葉には多重の意味がある。『こ』には水が涸れるの『涸』、時間が経過するという意味での『古』。『い』には『移』という他の場所に移すという意味も込められる。そして『こい』には『来い』という命令がある。色々と省いているが、文字一つ一つに膨大な意味が込められるのが、日本語というものだ。
極限的に言うと、『水よ。こ』だけでも法術は発動する。

今のは水を肉から適量自分の前に移動させたただけだ。

「まあ、水はいつでも作れるし、火も同じだから……一週間は、大丈夫かな？　というより、足りなくなったらそこら辺で狩りをすればいいだけか」

奪う命は最小限に。生かせる命は最大限に。

自分には生殺与奪を軽く行える、という自覚があるからこそ、この、制約。誓約。

驕っているわけではない。思いあがっているわけではない。ただ、現実を述べているだけだ。ここまで言えば自分の力に自信があるだけの嫌な奴にしか見えないが、彼にはそんな自信は欠片も無い。だが、自覚はしている。自覚なき暴力を振るうより、マシだろう。

そんな考え事をしていると、無音の肩がぴくりと動いた。驚きなどではなく、何かに気付いたような、そんな感じ。

「———煙と、悲鳴と……人の、血の臭い？」

森の木々の間を爽やかな風が奔り抜ける。無音の髪もそれに撫でられ、さらさらと動く。

その風に、血の臭いが乗っていた。それも、人間特有の血の臭い。塩分が混じった、不味そうな血の臭い。

「へえん。人は、やっぱりいるのか」

いたとしても、どうだろうか。人間という種族は、いくつもの奇跡が重なって生まれた存在だ。地球という箱庭が育んだ最高傑作といってもいいだろう。

そんな最高傑作が、まったく同じ形で、同じような文化経路をたどって、まったくの別世界に存在しうるのかどうかという問題。いたしたら、それこそが一番のご都合主義なのだろう。

「……風よ。探れ」

今回は、探るという意味以外に付与した意味は無い。ようするに、風という存在に探るという意味を付与しただけだ。

彼を中心として風が巻き起こる。森がざわめき、動物の唸り声の方々から聞こえた。

風に『乗せて』、様々な情報が彼に伝わってくる。
そして、

（馬車に、……生存している人間は女性が一人、男性が十人。女性の周りには鎧を着た人間が死んでいる……か）

文化水準は中世から近世ヨーロッパあたりと見て差し支えないだろう。ただ、その女性が使っている『術式』が、無音とは違う方式で行われているものなのだが、まあ、それは異界だから方式も違うのだろう。魔術や神術とかいう類のモノかもしれない。

少し、興味が沸いた。

「まあ、黙って見捨てて黙って死なれるのもあれだしな……言ってみれば、気分が悪くなるから助けようっていう、所謂ツンデレってやつかな。一音が僕にいつとも言ってたやつだ……」

あれ？ いい気分のする言葉じゃなく感じてしまったのは何でだ？ 一音に言われたらあんなに気分が晴れ晴れとしていたのに……。

そこで無音は気付いた。ようするに、自分は一音といわれればそれでよかったのかもしれないな、ということに、今更ながらに気付いた。

先に気付きたかった後悔。祭りの後の憂鬱。
そんな感じだ。

そんなときに、これ以上気分を悪くされてたまるものか、と無音は空を仰ぎ見ながらぼやいた。空には、太陽が一個、燦々と陽光を照らしている。雲はまばらに散り、いい昼寝日和だ、と思うのだが、無粋な黒い煙が一本、遠くの方で立ち上っていた。

法術を使うまでも無かったか、と。

「———悪くない、な」

人助けをするのも、悪くない。そんな気分だ。

彼はそんな自分の心境の変化に苦笑いをしつつ、身を四足獣のように屈め、地面を蹴り飛ばした。

地面が爆ぜた、と認識できるころには、もう少年の姿はそこにはなかった。

ただ、少年が向かう先は容易に予測できる。



「ふえ、ふええ……」

怖い、恐い。

なんでこんなことになったのか分からない。ちゃんとちゃんと冒険者の護衛をギルドから雇って、このウィード森林を抜ける算段を立てたのに。

冒険者になり立てのボクでも、それぐらいのお金はあったんだ。貯めたっていう方が正しい。Cランクの冒険者になって、地道に依頼をこなしていったって、一年かけて貯めたお金だったんだ。

けど、嵌められた。嵌められたんだ。

雇ったBランクの冒険者五人の内、三人がこちら辺を根城にしているっていうBランク相当の野盗集団と、内通していた。そもそもが、こんな手口を使う奴らだったのかもしれないけど。

いきなりスレイプニルが爆発した。何の比喻表現も無く、身体の内側から爆炎を伴って爆発した。

内通していたと思われる、三人の冒険者がいきなりボクに掴みか

かってきて、それを止めようと他の冒険者が割って入って、いきなりボクとはレベルの違う戦闘が始まった。

結果は、相打ち。どうやら、ボクを守ってくれた冒険者さんたちの方が強かったみたいだった……のに。

すぐに、件の賊たちが、ボクの前に現れた。

賊たちにとっては、冒険者が死のうが死なまいが、関係の無いことだったんだ。

「お嬢ちゃん、オレたちの仲間になるか、奴隷になって売られるか、慰み者にされるか、選**び**な」

そう、ボクに向かって下卑た笑みを浮かべながら言うてるのは、頭領。自身も、元Bランク冒険者。生活に困っていないのに賊になったのは、自分も嵌められたから、だったような気がする。

そんなことは、どうでもいいのに……。

「ど、どっちも嫌だって言ったら、どうするの？」

「お嬢ちゃんの白くてフワフワした髪の毛を、べっとりぬとぬとにしてやるよ。その可愛らしい口の中も、な」

「ぼ、暴力、反対だよ」

そう言いながら、魔力を練る。ボクだって冒険者だから、戦闘ぐらいは行える。

負けるだろうけど。

「し、死ぬのは、恐いかな」

「オレが揭示した中に、死ぬって入ってねえだろ？ まあ、どれも生き地獄だがよ」

「ツ！！」

その言葉を聞いて周りから笑い声上がる。

ボクは、その言葉に反射的に反応して、魔術を放とうとした。それが頭領にも分かっていたのか、同時に魔力障壁を展開してきた。

なにかもが、一枚上手。

だけど、今更、魔術を放つのをやめることなんてできない。そんなことをしたら、練った魔力が身体の中で暴れてしまうから。

「ッ！ 戦場を奔り抜けろ！ 雷槍！」

直径五十センチほどの雷が、一直線に頭領へと突き進む。ボクが使える、一番強い魔術。

だけど、そんな攻撃も、まるで興醒めっていう感じで、魔力障壁に阻まれた。

霧散する、魔力。

四散する、希望。

「お嬢ちゃん、決まったか？」

決まってしまった、ボクの未来。

ボクは、ボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクは——答えない。

「決めない！　ボクは、王国に行きたいんだ！！」

そんな叫びに、一瞬静まり返る賊たち。

そして、見る見るうちに顔色を変えて、唾を撒き散らしながら、大声で笑い出した。

悔しい。なんで悔しいのかなんて、そんなことも分からないほどに。違う、分かっているからこそ、悔しいんだ！

「ふえ、ふええ……」

情けない、泣き声が出る。

恐いから、怖いから。

悔しいから、悔しいから！！

「決めない、というのも——決意の一つだな」

音が消え失せるような爆音がその場を包み込む中、賊たちの後方から、透き通った綺麗な声が聞こえた。

「それも、いいさ。あやふやな決意より、幾分かマシだ」

男の人だ、というのは分かるのに。そうやって、周りの賊を雑草のように刈っていくその姿は、どうしても人間には見えなかった。

「まあ、僕は、そんな口弁を吐けるほど、人生経験は長くないけどね」

賊たちが吹き飛ばされていくその中で、ボクとその人は、ゆつくり目があった。
紅い。

「――誰？」

「気分屋の、殺神鬼だよ」

そういうと、『殺神鬼』と名乗った男の人は、ボクの前に立つと、背を向けた。そう、ちょうど、ボクと頭領との間に割り込む形で。

「名乗る意味は無いけど、一応名乗っておこうか。――近衛無音。通りすがりの、通行人Aだよ」

第一話：確認と説明と――邂逅と（後書き）

生徒「先生！ 廻くんが厨二病にかかってしまいました！」

先生「おい、廻。頼むから授業中に『俺の右腕がア』とか叫んでく
れるなよ」

生徒「先生！ もう手遅れです！」

先生「ああ、廻。かめはめ波の練習をするなって。廊下に立ってろ」

廻「はい！ バケツ持って空気イスっすね！ やっべWわっくわく
すんぞお！」

生徒「先生！ 逆効果です！」

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二話：泣きっ面に蜂が刺す前に、笑わせてあげようと思う

無音は腰に差ししてある黒刀を抜き放った。実はこの刀、材料は普通の鉄ではない。

隕鉄と呼ばれる、隕石に含まれる鉄を精製・鍛錬して打ち上げた怪刀。その重量は普通の鉄よりも遥かに重い。おおよそ二十倍ほどの重量差がある。

そして、法力など込めなくとも、普通に名刀として使える、大業物でもる。

「正義の味方だなんていうつもりはないけど、悪役ともいうつもりはないな」

「あ、あの」

そうやって聞いてくるのは、今しがた無音が助けようとしている女性だ。女性、と表現していいのか分からないが。

白い髪に蒼い瞳がよく映える。まるで、空のように透き通った蒼だ。顔は、童顔だろうか。年齢的に見て、十五歳ほど。文化水準から見て、ここら辺が大人と子供の境目と言ったところか。

「話は、後でもゆっくりできる。キミは、戦えるか？」

「は、はい！」

がくがくと震えていた足と肩が、ゆっくりと落ち着きを取り戻し

ていくのが分かる。

「そうかい。なら、巻き込まれないでよ」

「え？」

無音は呆然としている賊たちを見据え、黒刀を両手で構えた。
この程度の相手なら、わざわざ法力を込める必要も無し、だ。

「――剣舞」

たん、と。

その動作は、戦闘行為にしては、とてもとても軽いもので、とても軽やかで艶やかな動きで賊たちの中心に躍り出た。

その所作は楚々としたもので、まるで女形の舞の舞台のように、人々を引き付ける。

それは、敵も味方も、等価値に。

剣を振るっているのに、そのせいで風が舞い起こり、血が吹き荒んでいるというのに、それすらも舞に対する付加要素のようにしか見えなくて。

白髪の少女の足が、一步だけ、前に進んだ。

「……………ッ!？」

その足が急に止める。その足元に、暴乱の中央にいた賊の『一部分』が飛んできて、水気のある音を放ち地面にへばりついた。

驚愕だった。

気付いたら、吸い寄せられるように、自ら死へと歩み寄っていた。

「なん、で？」

考えるまでも無い。あの所作に、あの一つ一つの動作に、精神操作の効果があるからだ。

魅入るという言葉がある。食い入るように見ていると、自然と体がソレに吸い寄せられる現象がある。それも一種の精神感応の一種だと言える。

この舞は、それらを究極的に突き詰めた結果だ。

「ふッ！」

無音が黒刀を振るうたびに、人が形を崩していく。斬る、という動作がここまで凄絶に見えるのは、決して『舞』の効果だけではなはずだ。

血すらも、演出に見えてしまうほどに。

「い、いきなり現れて、全部。全部！ 台無しにするつもりかよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

そう叫ぶのは、今まで無音から一番離れた場所にいた頭領。それが、その手に持っている鎌を持って特攻を仕掛けてきた。

それを、右手の指二本で白刃取りをする。

「『いきなり現れて、全部』か。笑えないぐらい笑えるな」

掴んでいた斧を自分の方に引き寄せ、斧を握る頭領の太い腕を蹴り飛ばす。

水気のある音とともに、熟した果実よろしく真っ赤に弾け飛ぶ。

「ア、ああッ!？」

「あんただってしているだろう？ やり直す価値も無いよ、あんた」

無音は拳を大きく振りかぶる。

こいつの過去にあった悲劇的な出来事なんて知ったことではない。過去が、現在につながるの分かっている。

だが、過去を、現在に、繋げてしまうのは駄目なんだ。

肘から手首、拳にかけて一気に加速させる。それだけで腕の姿が霞む。

瞬間。ドパンッ！ と。空気を食い破りながら放たれた音速の拳が、頭領の頭部をそのまま消し飛ばした。

中枢を失った肉の塊は、糸の切れた人間のようにぶらぶらと腕を振り、時折身体を痙攣させながら地面に倒れ伏した。直後、吹き飛んだ首の断面から不気味な形で血液が噴き出す。

その光景に、ひっ、と周りから小さな悲鳴が起こる。一步一步後ずさっていく賊たちに死体から視線を移す。

その頬には、飛散した赤黒い血が、瞳と同じような色の液体が付着している。

「————逃げるなら、今の内だぞ」

それが合図だった。

あるものは持っていたシミターを投げ捨て踵を返し、あるものは腰の部分に黒い染みを広げながら走り去り、あるものは腰が抜けて

仲間に手伝ってもらいながら逃げて行った。

「……………終わった、かな」

周囲には、無音が斬り飛ばした賊の肉片と、頭領の大きな体と――白髪の少女しかない。

「あ、あの……」

声を震わせながらそう聞いてくる、白髪の少女。間違いなく、恐怖の対象として見られているだろう。

「あ、あり、ありり、ありがとう、ございまちッ!？」

「……………、」

今度は口を押さえながら蹲ってしまった少女。見たところ、なにか冒険するような格好で、動きやすさを重視した衣服、だろうか。もちろん、ただの衣服ではないのだろう。賊たちが身に着けていた薄汚れた服とは、なにか違う印象を受ける。

「大丈夫かい？」

「ひゃい！」

「ぬごッ!？」

あまりにも唐突過ぎて、敵意も殺意も感じられないその行動。予想なんかできるはずもない、その行動。

かけられた声に対して、少女はまるで弾丸のように上に飛び上が

った。

覗きこんでいた無音の顎めがけて、である。

敵意も殺意も無かったその一撃を、まともにくらってしまった無音。今度は彼の方が蹲ってしまおう。

いや、少女の方も顎の先（無音の顎が異常に堅かった）に頭の天辺がぶつかったせいで、頭頂部を押さえながら蹲ってしまった。

二人の少年少女が肉片が四散する現場で一様に蹲る光景。なんとも、シュールな光景だ。

「いだあい……ふええ、」

「ま、待とう！ 泣くのは待とう！」

無音は知っていた。このくらいの少女が泣くことの、その面倒臭さ。

まずもって、話を通じなくなるのだ。まるで地球外生命体と話しているかのごとく、話が支離滅裂になり荒唐無稽になり、最後にはまったく違う話になって眠りこけて終わり、というのが目に浮かぶ。

「ふえ？ えっぐ……あ、ありがとう、ごさいます」

若干目に涙を浮かべながらも、なんとか泣きわめくのはこらえてくれたようで、すつくと立ち上がった。

無音はらしくなく額に浮かんだ汗をぬぐいながら、慎重に言葉を選び、話しかける。この状態（泣く寸前）の少女は、ちょっとしたことで泣きかねない。

「キミの、名前は？」

「えぐ……ルルⅡノースクレインです……うえ」

若干、泣き過ぎてえづいている少女。

「そうかい。僕は近衛……ムオンⅡコノエだ」

それを華麗にスルーしながら、華麗な自己紹介をやった無音。少女——ルルは、無音が自己紹介を終えると、だんだんと落ち着きを取り戻していった。

「えっぐ……むーちゃん、ですね？」

「………うん、いいよ、それで」

これもまた、知っている。渾名をつけた方が長くなるのになぜか渾名をつけたがるという、この頃の少女特有の性癖を。

「……これから、どうしたほうがいいでしょうか？」

控えがちに自分より背の高い無音に上目遣いで聞いてみるルル。
無音はゆっくりと空を仰ぎ見ると、

「キミが決めるといい」

「……厚かましいかもしれませんが、王国まで護衛を頼みたいんですけど」

「いいさ、別に。あと、敬語はやめよう。そういうのは、なんだか『思い出して』しまうから」

「？ は、……うん」

「じゃあ、案内してよ。その、王国でとこに、さ」

少年は、少しだけ恥ずかしそうに後ろ頭を掻きながら、左手を差し出した。

「う、うん！！」

少女は目尻に溜まった涙を払い飛ばし、その手を勢いよく掴んだ。

これが、『泣き虫』と『神殺し』の、出会い。
ただの、運命的な、出会いである。

第二話：泣きっ面に蜂が刺す前に、笑わせてあげようと思う（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三話：神様だって色々ある

「そ、その……むーちゃんは、どこから来たの？」

「……………」

開始早々痛いところを突いてくる少女である。もちろん、腹黒なんかではなく、純粹に無音に興味を持っているだけなのだろうが。

「も、もしかして、『神楽』の人？ ルブルム大陸じゃ珍しいもんね、黒髪の人」

「ま、まあ、そうなるかな」

神楽、というのはどこかの国の名前だろうか。日本にも確かこんな地名があったが、どこにあったかなんてことは忘れた。関係の無いことであるわけだし。

今の会話で、今現在いる場所がルブルム大陸だということを分かり、黒髪という人間が少ないということも分かった。

「いいよねー、東洋の島国。なんだか、ワフウっていうのがメインらしいよ、なにもかも。もしかして、その黒い珍しい形した剣も、カタナとかいうのなの？」

なんだか一気にオープンになったな、なんてことを考えていると、

返答がないのを不思議に思っているのか下から覗きこみながら首を傾げていた。

無音は少しだけ慌てるそぶりを見せ、「あ、ああ。銘は『黒断』くろだちだ」と、聞かれてもいないことまで喋ってしまった。

「わあ、格好いいなあ」

わくわくどきどき、といった擬音が聞こえてきそうなほど無音の腰に差してある黒刀を食い入るように見つめている。知的好奇心が豊富なようだ。

「持ってみるか？　（ムリだと思うけど）」

「え！　いいの？　なら、少し拝借……」

無音が腰から刀を抜き、ルルに差しだすと、それを嬉々として受け取った。

数瞬後、ルルの身体が地面と熱い抱擁を交わしていたのだが。

「重量にして、百五十キロ。鍛錬もしてない奴が持ったら、こういう」

「な、なんでこんなに重いのか」

「普通の鉄とは比重の違う鉄を使ってるからだよ。そこら辺は、説明するのは面倒だから省くけど。同じ速さで同じ大きさの獲物を振れるなら、断然重量が重いものを振った方が威力は大きくなる。故に、こうなった」

木の棒と鉄の棒を想像してもらえば分かるように、どちらで殴ら

れた方が痛いかなんて、やられなくても分かる。

「まあ、それにしても、普通はここまで重くしないと思うんだけどね」

「普通じゃなくても、しなだと思うけど……」

ようやく、大地との爽やかな挨拶を終えた（無音が刀を持ちあげた）ルルは、ヨロヨロと朝帰りの親父のようにふらつく。

「ボ、ボクは宮廷魔術師志望だから、身体は鍛えてないし」

「ん？　それで、王国とやらに行くのか？」

「うん！　王国——デノフリュ—王国には大陸でも有名な魔術師の先生がいるんだ。その先生に教えを乞いに、毎年この時期になると大陸中から人が集まるんだ」

「……………」

「どうも、胡散臭過ぎる気がしないでもないが、この世界においてはこの子の方が知っている。まあ、元の世界に関しても、大して変わらないと思うが。」

「だとしたら、キミはその人の弟子になるのかい？」

「生徒になるの。その人、魔術学校を開いてるから」

さらに胡散臭さアップである。もはや詐欺の臭いしかしない。噂で有名な先生と私塾の合わせ技と言ったら、なんといっても詐欺

欺しか思い浮かばない。

「そこに入るためにはまず受験して、千位以内に入らなきゃなんないんだけど……難しいだろうなあ。競争倍率、十倍だもんな」

「十倍か……」

軽く見積もって、その王国にはこの時期に一気に一万人もの少年少女が押し掛けるというわけだ。おそらく、その王国とやらもお祭り騒ぎだろう。

「はあーあ。授業料もコツコツ貯めたんだけどなあ。無理っぽいよなあ」

「その授業料とやらは、キミが働いてためたのか？」

「うん。冒険者になって一生懸命働いたんだ。元いた街から王国の王都までにはこのウィード森林を通らなくちゃいけないから、そのための護衛も雇ったけど、……それが、このざまなんだけどね」

このざま、というのはつまり、裏切られてしまったということなのだろう。

「甘い話には裏があるっていうのは本当だね。ちょうど王都まで用事があるから格安で仕事を引き受けてくれる三人組だなんて」

それを信じた方も信じた方だろう。

騙す奴が悪いとこの場では言うべきなのだろうが、それは絶対とは言えないだろう。やはり、騙されるほうにだって非はあるのだ。しかし、

「……まあ、慎重に、ね」

そんなことを言って泣かれるのも面倒くさいので、無音は黙っておくことにしたらしい。これを彼女に知られると見くびっているように思われるかもしれないが、そうではない。

この少女、泣き虫なのである。

茂みから出てきた小動物に対して必要以上に反応して目尻に涙を浮かべ、こけては涙を浮かべ、疲れては涙を浮かべ、涙腺が緩いのだ。

よもや、少し強いことを言ったぐらいでは泣かないと思うが、一応は念の為である。心配するにこしたことは無い。

「もしかして……むーちゃんも、ですか？」

「その、もしかして、の意味があまり分からないんだけど」

嘘だ。分かってはいるが、こう言うのは自分の口で言わせた方がいいだろう。

存外。天然なだけの少女ではないらしい。

「その、甘い話には裏があるっていう……」

「さあ？ どっちだと思う？ キミの思っている方になってあげよう」

無音は、自分で言っているにも意地悪な質問だと思った。こんな質

問、誰に問うても答えは一緒なのは分かりきっているのに。

「じゃあ、むーちゃんのままだね！」

「じゃあ、キミのこともむーちゃんと呼ぼうか」

「え？ それは、違うんじゃないかな？」

「じゃあ、るーちゃんか」

「べ、別にいいけど……」

「嘘だよ」

「あう」

まだまだ、子供な二人だった。



「異界の者をこちらに連れてきただとッ!? いきなり戻ってきて
おいて、何を言っているのだ、フガクよ!!」

「五月蠅いな。少し黙ってくれ」

となりで喚く美しい金髪の女性の姿をした、この世界に神の一柱、ルベリア。たしか、戦と規律をこよなく愛する女神だ。

そんな大男の喚きを頭を抱えながら受け流すのは、白髪を後ろで結ってポニーテールにした優男。愛を司る、フガクだ。

二人がいるのは、神々の居城。北方大陸のさらに最北端に位置する場所に建てられた、道の構造物である。

彼らはそこにあるテラスにいる。

「この世界に異物を混入させるなど、前代未聞だぞ!? 世界という箱庭が、どれほど危ういバランスの下に成り立っているのか、知らないとは言わせんぞ」

「まあ、確かに俺が連れてきた少年はバランスを崩すことのできる存在だ。なんせ、俺を殺したんだからな」

思い出すのは、しんしんと降り積もる雪の上に横たわる自分の姿。全ての力を解放した自分が、相打ちであつても間違いなく一度だけ殺されたのだ。

「ならば、なぜッ!？」

「死なせたたくない、って思ったんだよ。あんたらみたいな高位の神サマには理解できないだろうが、生憎中位の神なんぞでな。人間の心とやらが、いい具合に分かってしまう」

「貴様はいつだって高位に昇り詰められる。それを再三貴様が流しているだけだろう」

「面倒臭いのは嫌いだ。俺は、遊んでいたら、それでいいんだよ」

そんなことを手の平の上に創りだした炎の竜で遊びながら言う。

「貴様がそんな性格だから、このようなことになってしまったのではないか」

「……誰かに操られてたつてのか？」

「そうとしか、考えられないだろう。私ではないぞ。私はそう言うのは苦手だからな」

「心配するな、あんたが馬鹿だったのは周知の事実だから」

「フガクウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウッ
!!」

「頼むから神力をそんなに込めるな。もう死にたくない」

大気に悲鳴を上げさせながら息を切らすルベリア。今の一撃を放つとなると、富士山級の山のふもとが全て吹き飛ぶレベルである。

「……貴様がそんなにたるんでいるから、狙われるのだ」

大気を震わせていた圧力をゆっくりとなだめ、語調も少しだけ柔らかくする。

「……俺のことを快く思わない、って奴がいるってのか？」

「違うな——今の世界が、気に喰わないんだ」

それは何故だろうか、とフガクは思う。今の世界は、とても素晴らしいものだ。

平和もあるし、戦争もある。裕福もあれば、貧困もある。生もあれば、死もある。正義もあれば、悪もある。幸福もあれば――不幸もある。

偏りなどほとんどない……はずだ。

「人からの侵攻も、高位から下位まで充分に行き渡っているだろう？ それも、今の世界のお陰じゃないか」

「一極化」

その言葉に、黙り込んでしまうフガク。やがて、離れようとしなかった唇を引き剥がし、声を紡ぎ出す。

「……人々の信仰を、占領しようってわけか」

神の力は、信仰心によって成り立っている。高位の神は、イコール人々によく知られているということと結べるだろう。

今は、それがほどよいバランスで、どの神々にも信仰が行き渡っていると言える。フガクなどは、その気になればもっと信仰心をあつめられるのだが、フラフラする方が性に合っていると気付いたので、中位の神に納まっている。

「リバーは、知っているよな」

「ああ、キレイだった」

「ダメレ。平和の神だ」

「ああ、あんたとは違っておしとやかで優しかったな」

「……………」

急に黙ってしまった、ルベリア。なんだなんだ？ と隣の方を見
てみると——莫大な神力が練られていた。引き攣りながら耳を澄ま
してみると

それは呪詛のような声にも聞こえて——立派な呪文詠唱だと、ギリ
ギリのところで気付けた。

「……集え、光よ。神をも殺す、そのまばゆさで、我が敵を穿てッ
！！」

「散れ、敵性。齒向かうべきは、空の彼方」

ルベリアから大気の鳴き声と共に放たれた直径三百メートルの光
が、反射鏡に当たったかのように空の彼方へと消えていく。

ルベリアは舌打ちをして、フガクを睨みつけた。

「……貴様、やはり力を抑えているな」

「まあ、あの少年とは本気で全力に暴走していたがね」

「チッ……リバーの神格が下がろうとしている」

これ以上の口論は何も生み出さないと思ったのか、話を戻した。

「……つまい、人間の間で争いの意識が高まっているってことだろ
？ それぐらい、いつものことじゃないか」

「中位まで、堕ちそうになっている」

「……それは、何万年ぶりだ」

「貴様が中位に、半ば自発的に堕ちた時以来、高位の神が堕ちた記録は無い」

ならば、六万と一年前か、とフガクは呟いた。そのころから、人の文明が少しずつ上がっていったのを覚えている。

フガクが知っている『あの世界』は文明としては科学に向かっていった。魔術に向かったこの世界では、低度文明のような高度文明のような、そんな感じだ。

馬車のような移動手段もあれば、飛行機のようなものもある。

それは置いておくとして——愛のある生活が薄まっていったのは仕方のないことだ。政略結婚など、挙げればきりが無いが。

「……前にも、あったな」

「ああ。酷い戦争だったよ。もう、何でこんなことをしているのか、何で憎しみあっているのか、何で殺し合っているのか——そんな大戦争があった。戦の神である、私でも、いやになるほど——」

「力が上がった、な。俺と入れ替わりのように……」

「わ、私ではないぞ、今回のことは」

「——知っているさ。あんたは、優しいから」

手の平の上で雷と炎の小さな竜を創りだし、戦わせながらサラリと言った。

それに、何かジワツと来るもを感じたルベリア。

「……だったら、悪意の奴か、混沌の奴が、怪しいな」

二柱とも、高位の神。

それは人間が、それらのことを無意識の内に望んでいることを意味している。

それらもまた、仕方のないことだ。

「折角戻ってきたというのに、この素晴らしい世界を滅茶苦茶にされるのは——いただけないな」
あそびば

「——戻るのか？ 天の坐に」

「……いや、もう少し身軽でいたい。——責任だとかは、まっぴらだからな」

「……そうか——だが」

ルベリアはズいっとフガクに顔を近づけ、険しい顔で、こう言った。

「——死ぬなよ」

どんな戯言を、と思った。

なにせ、神は死なないのだから、そんな心配は全くの無用だと、

「下位の神が、死んでいる。いや、消滅していると言った方が正しい。最近、ごく最近分かったことだが、神は死ぬ。滅滅させられた神力が信仰を上回れば——死ぬ」

「……なわ、俺は」

「ああ。貴様も、あと少し神力を滅滅させられていたら——消滅していただろう」

「——まあ、『ボチボチ』やるさ」

ふわっと、何もない空に浮かび上がる。
そのまま、フガクのいた空は、いない空へと、変わった。

「……アジュラと、カオスカ」

こっちも、『ボチボチ』やるか。

そう言って、古城の中へと、姿を消した。

第三話：神様だって色々ある（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第四話：年下の女の子について行くのも、いいかもしれない

「むーちゃん。……暗いね」

「だな……」

無音のことを根暗と言ったわけではない。

当然、王国の近くで馬車を壊されて、一日で、いや半日で王国につくなんてご都合主義、そうそう起こらない。

今日は夜の野営となった。略すと夜営である。

「……………風よ。消せ」

匂いを消し、獣が寄って来ないようにする。気配を紛らわせた方が安全だが、それならばやってきた獣を相手にする方が楽なのだ。

「ん？　むーちゃん、何かした？」

「ん、いや、別に」

隠す必要などないが、一応である。

「そっか……………ご飯、用意しなくちゃだね」

「干し肉ならあるけど」

「……むーちゃん、なんでも持ってる」

「持っているものなら、なんでもさ。無い時には出さないから、必然的になんでも出せる、っていうことになるだけだよ」

「？ むーちゃんだけに、難しいことを」

「上手くない。四十点」

「えー！！」

そんな感じで夜を過ごす二人。キャツキャツウフフなどではなく、アハハハウフフである。

無音が火を起こし、干し肉を水で戻して、ルルが食べれそうな香草を拾ったり、果物を集めたり……ちよつとした夕食が出来た。

「ボクの料理スキル、見せますよー」

「炭にはしないでくれよ」

とか言いあったり、

「お帰りなさいませ旦那様。お風呂にしますか？ 夕飯にしますか？
——それとも、ボ・ク・か・し・ら？」

「ご飯お願いします」

「ノリ悪いよむーちゃん」

「なに？ 襲って欲しかったの？」

「あう……」

無音はやはり意地悪ったのだが、しかしそこには笑いがあった。
あたりはすっかりオレンジ色に染まり、焚き火を二人で囲みながら、真っ暗になるまで二人は談笑していた。



無音は日本人だ。現代人だ。

和の心と言えど——やはり、風呂である。

土の法術を使い、掘り抜いただけの穴のような風呂場に、水の法術と火の法術を組み合わせ、お湯を流し込む。

ルルがそれを見たら、「結構裕福なんだね、むーちゃんちって」と言われてしまった。魔術があるんだから風呂ぐらい当たり前に出来そうなのだが、そうではないらしい。

入浴するなら集会浴場で。それも国が仕切っているのととても高い税金を取るらしい。なんでも、ここ数年はそれが顕著で、噂では

戦争のための軍資金を集めているらしい。

なにはともあれ、入浴である。

無音が、「先に入る?」と、実に紳士的に質問すると、ルルが、「うえ? ……そ、その、お先にどうぞ……あう」と、何故かどもってしまった。

「……嫌な予感がするけど、やっぱりお風呂は気持ちがいいなあ」

お湯をすくい顔にかければ、色々あった今日の疲れも吹き飛ぶ。空を見上げれば、区切られていない空が、悠々とどこまでも広がっている。

「……一日目にして、あの世界での出来事が夢みたいに思えるな」

もちろん、悪い方の夢だ。しかし、一音のことは夢ではなく……、と。

「……? 歌?」

そんなことを考えていると、遠くから歌声が聞こえてきた。まるで、ガラスのように繊細であり、鈴のように透き通っていて、一言でまとめると、

「——綺麗、だな」

「——♪——♪?——♪??」

それは、どんどん近付いてくる。幻想的な調べは木々に反響し、ざわめきが音楽団に聴こえそうな、そんな——、

「……………ルルか」

ぴたっと、唐突に声はやみ、辺りに静寂が戻る。
そして、近くの茂みが、がさがさと動いた。

「なにしてんだ？」

茂みの中から、うすい布を纏っただけのルルが出てきた。胸は薄い
が、少女から女性へと変わっていく段階か、丸みを帯びている。

「い、命を助けてもらったから、だから、そ、その……」

「……僕が、そんな奴に見えるのか？」

ようするに、助けてもらったお礼に身体を差し出します、とかい
うことを言っているのだろう。

だが、恥じらいで顔まで真っ赤にする少女に対して、無音はそん
なことをぴしゃりと言い放った。ルルの顔に動揺が生まれ、やがて
口を開いた。

「ち、ちが……」

「……違うなら、しちゃ駄目だ。女の子なんだから。そういうの
は大切にしなくちゃ駄目だ、な？」

「あう……ご、ごめんなさい。てっきり、そう思いこんじゃって。
冒険者の女友達も、『そういうとき』は『そういう目的』だって、
話していたから……」

どうやら、あの世界との価値観はだいぶ異なっているらしい。助

けたから体を差し出せとか、そんな即物的な要求をするのは飢えたサルどもだけである。

「生憎、飢えてはいない年頃の少年なんでね。襲うなら、とつくに襲われてると思うけど」

「ひう」

なんだかルルの身体が縮こまったように見える。

「ははっ。まあ、ルルは可愛いから、早く強くてカッコよくて優しい彼氏でも見つけるといいさ」

少年はルルの身体を指差しながら、「透けてるよ」と言った。彼女は顔をさらに真っ赤にして身体を隠した。

無音は自覚なきオトコノコらしい。何を自覚していないかなど、言うまでも無いのだろう。

ルルは目尻に涙をにじませながら、ぶつくさと、「むーちゃんの、えっち」と言った。

「今の場合は、ルルのほうが変態に見えるけど」

「あう」

「……その格好が寒いなら、中に入るか、服着てきなよ」

湯船と林の奥の焚き火をたいいてるところとを交互に指差しながら、真顔でそういう無音。ルルの身体がぷるぷると震えているのが分かるのだ。

ルルは顔をさらに紅潮させると、「あうあう」と呻きを上げなが

ら湯船の方を指差した。穴の幅は十メートルぐらいほど、二人ぐらい楽勝だ。

「は、入るから、こっち見ないでね？」

「もう、ほとんど見たようなもんだけど」

「あうう」

そんな意地悪を言いながら後ろを向く。お湯は乳白色なので（土から染み出した）、透けることは無いだろう。

後ろからお湯の温度に、「あうん」と呻く声が聞こえるが気にしない。

「い、いいよ……」

と。

少し震えた声が聞こえた。潤んでいるのかもしれないが。

ゆっくりと振り向くと、ちょうど向かい側に、白い髪まで紅く染まりそうなほど顔を真っ赤にしたルルがいた。

そんなに恥ずかしいなら何故入って来たんだ……、と心の中で呟いた無音。

「む、むーちゃんって、ヘンな男の人だね……これでも、旅の途中は何度か襲われかけたのに……」

「気を操ってるから、ソツチのほうも操作できるんだよ」

「……じゃあ？」

「気力だよ。気力。いろいろと、こうやって話しているのにも、結構な努力をようしている」

そんなことを涼しい顔で言われても困るのだ。ようするに、それは、偶発的な事故が起きてしまうと、別に故意的なものでなかったとしてもあったとしても、それはつまり、はっとした拍子でルルを襲っちゃうかもということを暗示しているわけで。

年頃の女の子であるルルは、顔を半分湯につけて、「ぶくぶく」と泡立て始めた。

「はは。僕が『ソノ気』になって気の操作を解かない限り、永久的にソンな気にはならないから安心して」

「……………はっ!? なっ、なんでボクは残念がって……………ひやうううう」

ぽちゃん、と。水音を立てて、お湯の中に消えて行った。
そういえば、

「一音にも、なんだか『ヘン』って言われたなあ」

そのときも、お風呂に入った時だったか…………と、

「ぶっひやああああッ!?」

目の前にルルが水を撒き散らしながら飛びだした。

……………泳いでたのか、と若干呆れる。中は白濁としているし、高温なので目を開けたら痛いだろうに、そんなことにも気付かなかったのか、「ひうあううっ!?」とうなりながら目をこすっている。

「だーいじょーぶかー？」

「だ、だいじょ……うぶ？」

と、そこで、無音の声が近いことに気付いたのか、こすっていた手を離し、まじまじと無音の紅い瞳と目を合わせた。

「……………なう」

「ちやお」

直後。拳が放たれ、入浴タイムは強制終了となった。
誰が誰になど、言わずもがな、である。



「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」

「いいよ、イタくなかったし」

焚き火を二人で囲みながら、何気ない雑談を交わす。
二人を照らす仄かな火が、中央で燃えている。

「そういえば、風呂に近づいてくるとき、何か歌った？」

あの幻想的な歌声は、今でも耳に残っていた。

「え？ うん。怖い時とかによく歌うんだ。作詞作曲はルルだよ」

パチパチ、と。無音が手を打ち合わせる。

その行動に不思議そうな顔を浮かべるルル。

「ど、どうしたの？」

「拍手だよ。拍手拍手。すごく綺麗だった。また、聴かせてよ」

思いつきり口元を釣り上げ、目を細めながら賛辞の拍手を送り続ける。

思わぬところで褒められたのが恥ずかしいのか、「え、えへへ」としか言わなくなってしまった。

「じゃ、じゃあ、今、歌ってあげる！」

「はあは。今日は遅いから、また、今度にでも」

「う、うん！！」

そこら辺のおがくずと広い葉で作った簡単なベッドの上に寝転ぶ二人。

「おやすみ、ルル」

「おやすみ、むーちゃん」

———ありがとう、と。

二人は、二人とも、心の中で、言い合った。



次の日の朝。定刻通りに起きたとすると、午前五時だ。この世界の一日が二十四時間ならば、だが。

小鳥のさえずりが聞こえる。横を見ると、「うにゃん♪」と気分よさげに寝言を言っているルルの姿が。

……………安心、しすぎだろう…………。

「…………起こすか、眺めるか。…………起こすか」

ルルが気持ちよさげに呻いているそばに近寄り、「おそっちゃうぞ」と耳元でささやくと、「ふわん！」と身体を飛び起きさせた。

「嘘だよ」

「むーちゃん、ひょっとして、意地悪？」

「今頃？」

「……あう」

それから。

簡単な朝食を済ませて『出立』の準備を整える。王国は、実はもうすぐそこにあるらしい。

そして、ゆっくりと歩き始めた。何気ない雑談と、何気ないやり取りと。王国に近づくにつれて、ちらほらと人とすれ違うようになっていた。

やがて、巨大な門が見える。

「むーちゃん、あれが、王都ベールクラウンの門だよ」

「……デカいな」

近づくにつれ、その大きさがまじまじと分かる。

「……まあ、ここでお別れだね」

「えっ？　なんで？」

ルルとは王国までの護衛を頼まれていたのだ。なので、王都に着いたからには、もう自分は用済みというわけで、

「いや、これからずっと一緒ってわけにはいかないし」

「なんで？　むーちゃんって、何かすることあるの？」

「……ないな」

そういえば、生きるという目標以外は何の目的も無い。根なし草の放浪旅をこれからずっと続けるつもりだったのかと思うと、自分の無計画性が恥ずかしくなってくる。

そこで、ルルがこちらに手を伸ばしてきた。

「いっしょじゃ——だめ、かな？」

「……………あはっ」

一つだけ笑って、その手を取った。

第四話：年下の女の子について行くのも、いいかもしれない（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第五話：笑ってしまうぐらい適当に生きれば、それでいいんだと感じる

――あにさまあ！ おんぶー！

――はいはい。かずねは、あまえんぼさんだなー。

――たっかーい！ あにさま、もっともっと！

――ははは。そら！

――ひゃー！――！ たっかああい！

――まさかの二段ジャンプ！

――ひゃん！？ ひっぐうううう！

――はははは！ かずね、つぎは何してあそぼーか？

――うんとね、おにごっこ！

――じゃあ、ぼくが『鬼』だ。十数^{とお}えるから、

――にげるううううう！

――いーち、にーい、さーん、しーい、ごーお、ろーく、し

「いち、はいち、くーう、とお！ ……あれ？ かずね？ どこにいったの？」

「……どーん！」

「……のおっ！？」

「……あにさま、だあいすき！」

「……ぼくも、だよ。かずね。」



「……夢、か」

布団をゆっくりと引き剥がして起きようとするが、まったくもって動けない。身体右半分は男性としたら幸せな感覚が広がっていた。そう。気を操作していない朝ボケ状態の無音なら興奮してしまいそうなほど、

「……うにゃん」

「ッ！」

何故かルルが無音の布団に潜り込んで、抱きついていた。服は寝巻で、薄いカーディガンのようなものを羽織っただけの状態で、ほとんど直のような感触で……、

（操作……操作アッ！）

なんだかんだ、達観したような口を叩いても、所詮は思春期の十七歳なのだ。女の子のあられない姿を見れば、興奮したりする。

「……にゃおん」

「……安心し過ぎだ、馬鹿」

無音はそういうと、散々な寝起きで物凄くだるい身体をルルから引き剥がしながらゆっくりと起こした。

周囲を見渡すと、向かい側にもう一個シングルベッド。間には簡素なテーブル。窓からは朝日が差し込み、外からは慌ただしい市場のざわめきが聞こえる。

「宿か……」

あの後、来たには良いけど試験までにはまだ日があるから、ということで早速宿にチェックインすることになったのだが、冒険者風の出立ちの少女と、黒い刀一本ぶらさげた少年をどこの宿が快く引き受けてくれるというのか？

もちろん、ギルド運営の宿屋である。

一階は酒場とギルドカウンターがあり、二階と三階には宿屋がある。

ギルドのメンバーであると宿泊料が格安になるという宿だ。主に、

初心者冒険者によく使われるらしいのだが、その初心者冒険者よりもこの世界のお金を持っていない無音は、やむなくルルのヒモとなるしかなかったのだった。

「ヒモは、……なんだろう、僕の奥底でそれは駄目だと言っている気がする」

ならば、と。

この世界で簡単に慣れる職業と言えば、冒険者である。資格や条件などはほとんどいらない。後はギルド受付嬢の営業スマイルでも見ながら、書類にカキカキするだけでオーケーなのだ。

まあ、命を顧みない、という条件だが。

「ルルも寝てるし……今の内に行ってくるかな」

そういうと、そそくさと腰をかけていたベッドから立ち上がって部屋を出ていった。



一階に降りると、既にギルド従業員が慌ただしくそこかしこを行ったり来たりしていた。ギルド従業員、酒場。この二つから連想される人物像と言えば、ウェイトレスである。

まさしくそのウェイトレスが、冒険者の英気を養うための食事を

準備するのに追われていた。流石に朝からアルコールを摂取するツワモノはいないらしいが、肉類など精がつきそうなものをたつぷりと注文してがつついていた。

無音はそれを横目で流しながらギルドカウンターの方へと歩んでいった。

かべにちいさな小窓が開いたようなそれに、大人っぽい顔つきで朝の酒場の雰囲気を楽しんでいる女性の姿があった。

そんな彼女も少しだけ異質な雰囲気を漂わせて近づいてくる無音に気付いたのか、ぴくりと緑色の視線を彼へと向けた。

「やつほー。少年、はじめましてかな、かな？」

「はじめましてですね、はい」

若干女性の明るい雰囲気に圧倒させながらも、クールなキャラを崩さずに返事をした無音。

「今日はこういったご用事かな？」

「ギルドの登録って、誰でも出来ますか？」

「出来ちゃうんだなこれが。名前以外はほとんど偽で構わない。そんな破格の条件で、ギルドに登録が出来ちゃいまーす」

ぶいぶい、と。なんだか妙にハイなテンションで応対してくる受付嬢。

改めてその容姿を見ると、それなりの美人。十人中五人は絶対に振り向き、残りの五人は趣味によって異なる、そういった美人

だった。

黄色い髪に、おっとりとした碧眼。猫のように丸められた目元。

「じゃあ、登録の手続き、お願いします」

「はいはいーん。はい、これにサインぷりーず」

ぽんぽん、と。一枚の羊皮紙と、一本の羽ペンを渡された。その羽ペンを手に取ると、何か不思議な力を感じる。昨日、王国に向かう途中にルルと話した魔術とやらだろうか？ 根本的に法術とは理の違う力が適用されているらしい。

まあそんな小難しいことは置いておき、早速偽装オンパレードの手続きに入ろうとしたところ、そこで、はた、と気がついてしまった。

（……文字って、日本語でいいのか？）

駄目だろう。

アメリカで日本語を、『これが母国語なんだから仕方ないだろ！』と叫ぶぐらい駄目だろう。

駄目なのだろうが、そこはご都合主義とやらが働くのが様式美である。美しくなどないが、様式美なのである。

羽ペンでサラサラと、ムオンⅡコノエと書き、出身地はカグラ、近接戦闘が得意、などなど、真実と虚偽を織り交ぜながら、見る人が見れば、少しだけ有能な人間、に見えるぐらいのプロフィールに仕上がった。

その羊皮紙を受付嬢に渡すと、「ふむふむ」と個人情報眺められた。

恥ずかしい。嘘なのだが。そんなものである。

「へえん、カグラ出身なんだねー、少年は。一回行ったことあるけど、うん、まあ、悪くは無いね」

「そうでしょうね」

「うん、自分の見た目によくあつた偽情報だ」

「……………」

この女、常人ではない？ という疑念が無音の中で生まれた。僅かに殺気立つ無音を見ながら、受付嬢は、「怒らない喚かない騒がない」とたしなめ始めた。

「なんで、分かったんですか？」

「分かってないよ。カマかけたただけだものね。それに見事に引っ掛かってくれただけだよ、少年が」

あたしみたいな一介の受付嬢が、情報の虚偽なんて分かるはず無いじゃんきやははー、と笑われてしまった。

どうやら、無音少年は、人とのやり取りに関しては、大してうまくは無いらしく、人とのやり取りのプロである受付嬢には敵わなかったようだ。

「で、どうするんですか？」

「どうもしないよ、っと」

そういうと、てきぱきと何かの準備に取り掛かる。

脇に置いてあったプレス機械のようなモノに、羊皮紙を挟むと、がしゅん！ という音を立てた後、下の方から何かが出てきた。

それは、カードであった。

「はい、ギルドカード」

「はい？」

「正式名称は、ルブルム大陸公式ギルド会員証明書とも言う」

とも言う、ということは、やはり正確な名前ではないらしく――ではなく、

「いいんですか？」

「だから、最初に言ったじゃん。名前以外は、ほとんど偽で構わないって。本人が本名以外を書く、そのペンは文字が書けなくなる仕組みになってるしね。そこは魔術を応用しているわけだけど、本名って言うのは、その人の魂を表わすらしいから、だから、それを利用してあるみたいなんだね」

本人もよくは分かっていないようで――つまり、

「おめでとう、これからよろしく。少年」

というだけのことなのだった。

第五話：笑ってしまうぐらい適当に生きれば、それでいいんだと感じる（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第六話..『ボチボチ』やっていくことにする

「ぶまーい！ 王国のお料理って、美味しいね！ ね、むーちゃん？」

「……そうだな。ルルの作った、いや、創ったというべきかな？
朝ご飯、否、暗黒物質ダークマターよりは大分美味しいと思う」

「あ、あれは！ ボクが魔力操作を間違って、」

「ぼん！ 新鮮な卵が見るも無残な暗黒物質ダークマターに変質したというわけだねルルくん。それを僕に食せと、言ってきたわけだね。たしかに卵ってのは貴重らしいから、無気にするのが嫌なのは分かるけど、それで僕の舌は今でも麻痺しているというのに、味の分からない僕に対しての当てつけとしか思えないのだけども？」

「……あう」

とまあ、王国についてから二日目の昼。朝の、愛のあるお料理コーナーで一時的に味覚を失った無音を尻目に、ルルは美味しそうなスープとパンをばくばく食べている。

「け、けどさ、ボク的には結構いけたと思うんだよ？ あの、」

「暗黒物質」

「うん、もう暗黒物質で良いけど。ボクは食べれたのに、なんでむーちゃんは」

「知ってるか？ 人って、自分を客観的に見れない生物なんだ。だから、自分が作った料理は例外なく美味しいと感じてしまうんだよ。たとえば、それが暗黒物質だとしても」

「しつこいよむーちゃん！ 過去を嘆くばかりの男は嫌われちゃうよ！」

「現在進行形で僕の舌は麻痺してるけどな」

まるでゴムを噛んでいるかのような感触に顔をしかめながら、何かの肉を咀嚼し、飲み下していく。味がしないのだから、もう泥でも啜れそうな気分だ。

そんな、過去ばかりに囚われる男、無音少年を少しだけむすつとした表情で睨むルル。

「大体、女の子が男の子の為に作ってくれたものなんだから、文句言わずに食べなきゃ」

「文句を言わずに食べた結果が、これだよ」

「むきー！ そんなこと言ってばかりいると、むーちゃんの朝ご飯は毎日アレになっちゃうよ！」

「激怖いこと言うなよ」

そんなこんなの、あんなこんなので——、ギルドの受付嬢前。

「あら少年。もう女の子を引っ掛けたの？　手が早いことこの上ないわね」

あの後名前を教えてもらった受付嬢、ウェールという女性。猫のような雰囲気。子供っぽい性格で、クールに接しようとする無音の上に行く。いい意味であるとは限らないのだが。

「違います！　むーちゃんはボクのこと助けてくれた恩人なんです！　そんな女だったらしじやありません！」

そこで反論するのが、ルルである。白い髪を揺らしながら、勢いよく反撃した。

それを見てウェールはくすくすと笑い、「ヒモ生活だもんね。そりゃあ女だったらしじやないよ」と痛いところをついてくるのだった。

「ウェールさん、そのヒモ生活を脱するためにですね、なんか割の良い仕事ないですか？」

もう面倒くさいからさっさと仕事進めろ猫女、と言いたいような顔をして言う無音。

それを分かった上で、まだヘラヘラと笑いながら、ウェールは、「分かったわよーん。割の良い仕事、ね」と脇に置いてある資料をあさり始めた。

掲示板にでも行けばそれなりの仕事は揃っているが、どれもこれも『しょぼい』。しょぼい上に、報酬も少ない。

ここで一気にヒモ生活を脱する決意をした無音。

今度はこっちが養えるようにと――何故、養う養えないの事になったのかと、そう疑問に思ったこの頃。

「あったあった。これなんてどうかな？」

少年だったらできるんじゃない？ と少し軽い調子で出てきた依頼書には、こんなことが書いていた。

「ロックドラゴン『岩竜の討伐』？」

「ね？ 少年なら出来るんじゃない？」

そんな軽い調子で出てきた依頼は、Aランク。
間違いなく、成功すれば英雄と崇め讃えられるほどの依頼だった。



「あの受付嬢さん、どうかしてるよ！」

それが、宿舎に戻ったルルが最初に言ったことだった。言う、というよりも、怒鳴ると言った方が正しいが。

「竜種だよ、あの！ 一頭討伐するのに、国が動くっていう！」

「ルルは自分が受けたわけでもないのに、何でそんなに怒ってんだ？」

一息も置かず、ルルは、

「怒るよ！ 友達だもん！ むーちゃんのことは、我が身のように！」

右手を腰に当て、左手の人差し指を、ビッシィ！ と向けられる。
やれやれ、と首を横に振ると、頭をぼりぼりと掻きながら、こう
言った。

「オニーサンに任せてろって。報酬がよかったら、僕が色々援助するから」

それぐらいの恩は感じてるから、と無音。

しかし、それでもルルは納得がいかないらしく、激昂やら憤慨やら、怒りのイメージがどんどん高まっていく。

「だ・か・ら！ ドラゴンなんだよ、ロックドラゴン岩竜エンシェントロックドラゴンっていうのは！ 岩山竜
よりは一ランク下といっても、」

無音は、音も無く、いつの間にかルルに近寄り、その頭に手を置いた。

そして、ゆっくり動かし始める。

「大丈夫、だって」

屈託ない笑顔をルルに向けると、彼女は顔を真っ赤に染めて、「も、もう知らないんだから！」と言って、「あううううう！」と叫びながら布団に潜り込んでしまった。

少し、子供扱いが過ぎたかな？ と、少々後悔するが、先に立た

ないものの代名詞である後悔など、するだけ無駄だと無理矢理思い込んだ。

怒り…恥じらいⅡx…yの心模様なようである。
とにかく、機嫌を取り戻そうとルルに話しかける。

「ルル、入学式はいつだ？」

「まずは入試が先だよ」

若干イライラした声でそう言われてしまった。顔も合わせてくれない。こうなれば、苦し紛れの笑いを浮かべるしかないのだが。

「入試は一週間後。もし、合格したら、その二週間後に、入学式だよ……」

少しだけでもじしたように、そう伝えてきたルル。顔は合わせてくれないが。

こちらにも、苦味が少しだけ薄れた笑みを浮かべながら、ルルが潜り込んでいる布団を眺めて、

「分かった。なら、入学祝いに、杖でも新調しようか」

もう、ルルが入試に合格できること前提で話を進める無音。

「むーちゃんの……バカあ!!」

家財道具の集中砲火を浴びせかけられ、やむなく部屋を強制退去させられてしまった。頭を庇いながら二人一部屋の手狭な部屋から出ると、ぱたんと力無くドアを閉じた。

そのドアに背を預けながら、天井を仰ぎ見る。

「……………まあ、『ボチボチ』やるか」



普通、冒険者になり立ての無音がAランクの依頼を単独で受けることなどできない。それは、ギルドの最低限の配慮でもある。

だが、今回無音は、その依頼を受けた。

「少年。知ってる？ 少年が持つてる、その羽。そうそう、腰に差してる黒い羽。それね？ ウィード森林の主、レイブクロウっていう魔物の羽でね？ Bランクの魔物なんだ。だから、そのことギルドマスターに話したら、ああ、無断でごめんね、『話したい』だつてさ」

だ、そうだ。

それから、応接室のようなところに通せられると、出てきたのは白髪の、精悍な顔つきの老人。ゆとりのある服、というよりも布のような、宣教師のような格好をした老人が出てきて、「ギルドマスターのユビルだ」と手短に自己紹介をした。

「さて、その羽。どこで手に入れたんだい？」

「千切って」

黒刀でずばんとやったあと素手でブチブチ、これ以上なく簡単な説明だ。

それにユビルも、「そうかい」と頷くだけだった。

彼は、何か考えた後、今回の依頼書である羊皮紙を両者の間に掲示した。

「冒険者には、いくつかの形がある。その日の糧を得るために命を懸ける者。富や名声を得るためにその身を果ての無い冒険に捧げる者。強くなりたい者。出会いを求める者。死地を得たい者。……君は、どんな冒険者になるんだい？」

それは、答えなどないのだろう。よくある、全てが答えの問いだ。何を言ったところで、「そうかい」としか言われないような、そんなありふれた問いだ。

無音は、しなし考えた後、低い天井を仰ぎ見て、ユビルに視線を移す。

「人間臭い、冒険者に」

その答えに対しての返答は、やはり、「そうかい」だった。

「ローレンス岩山地帯。そこで最近、岩竜ロックドラゴンが暴れている。原因は不明だが、急速な対処が必要だとされている」

依頼書に視線を落とす二人。そこには、伝承の岩竜を表わす絵と、簡単な説明。

ユビルはそれらに補足説明をしながら、淡々と告げていった。

「ランクとしてはA。だが、場所が不安定だ。あらゆる意味で、安

定していない。Sまでは行かずとも、そうだね、A十ぐらいはいいだろう。それでも、君はこの依頼を受けるかな？」

「受けますよ」

少し、気になることがありますし、と、一瞬も間を置かずと言った。

それにはユビルも少し呆れたようで、「若いね」と呟いた。精悍な顔つきが、苦味を含んだ笑顔でくしゃつと歪んだ。

第六話.. 『ボチボチ』やっていくことになる(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第七話：気づいて、気づかされて、気づかせて（前書き）

甘酸っぱい。

第七話：気づいて、気づかされて、気づかせて

何事にも、先立つ物は必要だ。金が、金が必要なのだ。綺麗事など、クソ喰らえがお決まりのお金である。

さて、ここで旅の準備にかかるお金はどれくらいかかるのだろうか？

ローレンス岩山地帯への道のりは、往復二週間。

その間の食事や路銀、移動手段等々、出費も結構なものになるのだ。

さて、無一文、近衛無音少年は、旅に出られるのだろうか？

出られるのである。

あの、黒い羽根。魔導具の材料として、かなりの高品質のもので、ギルドがそれを買って取ってくれた。

金貨一枚。平民の年収の半年分だそうだ。

さて。これでヒモ生活は脱したようなものだが、無音はそれでもこの依頼をやめようとはしなかった。

無音は旅に必要なものを王都の市街で買いながら、あの依頼書のことを思い出していた。

「その、岩竜って突然暴れ出したんですか？」

あの会談時、無音はユビルにそう問いかけた。

野生動物が（この場合モンスターだ）暴れて周囲に被害を及ぼす、
というのには、必ず何らかの理由がある。

人間とは違い、大した理由も無く、その力を振るわないからだ。
娯楽を求めず、ただただ合理的に『生』を望む彼らが、何の理由も
無しに、突然暴れ出すなんてことは、ほとんどあり得ない。

ならば、そこには理由があるはずだ。

そこには、同種族同士での縄張り争いとか、人間の土地開発による
影響だとか、食糧難に襲われたとか、はたまた、自然災害による
突発的暴乱など、理由はある。

ユビルは少し考えた後、一枚の紙を懷から取り出した。

それは、羊皮紙などではなく、ちゃんとした紙だ。質は荒いが、
なかなかどうして、羊皮紙よりは見栄えがいい。

「『カメラ』というものはご存知かな？ ギルドの技術部の方で開
発したもののだが、如何せん、まだまだ改良の余地はあってな、
白黒でしか物体を映すことが出来ないのだが」

そう、それは写真だった。白黒というより、セピアというかなん
というか、明治だとか昭和だとかの初期に撮られたようなものだが
——写真だった。

「いえ、寡聞にして知りませんでした」

知っていておかしそうな情報はなるべく知らないふりをする。余
計なトラブルや欺瞞を生まないためのテクの一つだ。

その一言をユビルは疑った様子も無く、「で、この写真なのだが」
と話を続けた。

「その依頼の場所である、ローレンス岩山地帯で、ギルドの職員が偶然撮影したものなのだが——発光物体、と言えばよいのかな？」

そこには、眩く光っていると思われる、何らかの物体が映っていた。

余程遠くから撮影したのか、それは点ほどにしか見えなかったが、点ほどにしか見えない物体がそれほどの光を発していたわけで。夜に撮影されたのか、空をも薄暗く照らしている。

不気味なほど、神々しかった。

そして、その光、見覚えが、ある。

「これが、一か月前。そして、その一週間後ほどから、ロックドラゴン岩竜の暴走が始まった」

「ギルドとしては、この発光物体が関与している？」

「いや、それはわからん。これが何なのかさえ、わからない状況なんだ。まさに正体不明、不得要領、曖昧模糊の塊だ。ギルドとしても調査を出したいところなのだが」

そこで黙ってしまう。

そう。その調査を出したいところに『ロックドラゴン岩竜』が暴れているものだから、何の調査も出せない。下手に出そうものなら、全てが死体となって、それで終わり。

死体。

痴態。

そうなるのだけは、避けたいと言ったところか。

「そうですか。じゃあ、これで」

向かい合って腰かけていた上等なソファから腰を上げようとすると、急にユビルに話しかけられた。

「……本当に、大丈夫なのかね？ キミは、将来有望だ。ここで数十年務めてきただけの老人が言っているだけなのだが、それでも、光るものを感じる。いや、既に光っているか。本当ならば、万全を喫して、Sランクの冒険者にでも依頼すべきなんだ」

なんとも言えない前傾姿勢になったまま、その言葉について一考した無音だったが、答えなんて出るはずの無い、ただの疑問だったので、そのまま立ち上がった。

しかし、——答える必要のないものに答えるのも、また、人間関係か、と思い、無音は口を開いたのだった。

「大丈夫か大丈夫じゃないかといえば、限りなく大丈夫なんじゃないですか？ ほら、岩竜っていうぐらいですから、ノロそうですし」

僕、これでも足の速さには自信があるんですよ、と。地を駆ければ音をも超える少年が言うには、あまりにも物騒な言葉だった。

これに対してもまた、「そうかい」と、呆れたように答えるしかないユビル。

「にいちちゃん！ で、それ、買うの、買わないの！？」

「ん、ああ、ごめん。干し肉ね」

露店の乾物屋のおじさんに声をかけられ、急に意識を戻される。まあ、最初から大したことを考えていたわけでもないのです、そのま

ま手に取っていた干し肉を二週間分ほど、買わせてもらった。

それを入れるのは、ギルドから支給された魔導具で、なんでもこのポーチの中には数百倍の体積の物が入るとか。

ギルドで崩した金貨一枚分。銀貨百枚は、やはりかなりの大金らしく、先程からかなりの買い物をしているが、あまり減っていない。

「にいちゃんも、冒険者かい？」

「まあ、そうだな。成り立ての駆けだしだけどさ」

「そうかい。だが、おれにはにいちゃんの光るものが見えてる。有名になって、成功したときは、『この店の干し肉食べたおかげ』って言ってくれよ」

「はは、まあ、考えておくよ」

「よしっ。じゃあにいちゃん、毎度！」

古き良きを感じた気分だった。

それから、着替えとか、様々な旅の為の支度をし、何をするでもなく、街をぶらぶらする。

なんというか、気まずい、という奴だろうか？ と無音は心の中に芽生えた身に覚えのない何かしらを感じる。もちろん、ルルとの喧嘩についてのことなのだが。

ルルが一方的に悪い、というわけではない。無音だって、自分のかたくなさがこれを招いたことだとも分かっていた。本来であれば、あそこは自分が退くべきだったことも知っていた。ルルの怒りも、自分のことを心配してのことだということも分かっているため

に、なかなかどうしてやりにくい。

だがしかし、無音にだって何の意味も無く頑なになったわけではない。

微かな、きな臭さ。

最初は、ただの杞憂程度だとは思っていた。だが、ギルドマスターであるユビルの話を聞いて確信した。あの写真を見て確信した。

あれは、『神』に類するモノの、光だ。

全身の血が、沸いた。

どうして、自分の身がこれほどまでに昂っている理由を、無音は自覚していた。自覚させられたと言った方が正しいかもしれないが。

自分の存在意義。

自分の存在証明。

そこには、いつも、『神』がいた。

神を殺す為に、愛も無い男女の性交から生まれた自分の存在意義など、存在を証明する方法など、やはり、これしかないのだ。

殺神鬼。

神を殺す、鬼。

人外。人でなし。

所詮は、それだけなのか、と。

無音は、次第に暮れはじめた、オレンジ色の空を見上げながらそう思った。

妹を守りたい、と思ったのも、やはり、それが関連していたからなのか。

だとしたら、自分はとても滑稽な人生を送っている。そう思わずにはいられなかった。

結局。その程度でそれだけでそこまでなのだ。自分が命を懸けていた理由など、ただ、神程度の存在を殺すことだった。

あの血の騒ぎ。

ようするに、『歓喜』。

自分の存在意義を、自分の存在証明を、見つけられた時の、言い知れない、心の底からの歓喜。

たった数日、自分が日和っていたことなど、全て幻想だったかのように、全身が歓喜した。喚起、した。

それが、どうしようもなく——嫌だった。

そんな風には、思いたくない。

だからこそ、『ボチボチ』。

「……『ボチボチ』、やる、か」

無音の紅い瞳の奥まで、夕焼けは染めていた。

ちよっと考えているだけ。そう思っていたのだが、随分と長いこと思考に耽っていたらしく、街は完全にオレンジ色に染まっていた。出店などは、何か作業でもしている、この世界で言うところの魔術でも使って、明りでも灯すのだろう。それ以外にも、昼とは違う顔を見せ始める店だってある。

呼び込みなどを行う娼館など、色っぽい。

そこに、不釣り合いなほど、白い白い少女が立っていた。

息を切らして、ふわふわした白髪を乱雑にして、清楚なワンピースを泥だらけにして、無音の前に立ち止まっていた。

立ち止まっていた。

無音を、立ち止まらせていた。

「……ルル？」

「はあっ、はあっ、はあっ！」

どうやら、ずっと走っていたらしく、息も絶え絶え。蒼い瞳が、若干充血しているのが分かる。俯いている。

酷く――憔悴している。

「大丈夫か？ 具合、悪そうだけど」

いつの間にか、昂っていた血が治まり、冷静になった頭で、無音はルルに近づく。

そして、気付いた。

――泣いて、いる。

「ルル？」

「―――した」

途中まで喋っていた言葉は、か細過ぎて聞き取れなかったが、最後の言葉は、喉がしゃくりあげたのか妙に高い音だったが、聞きたれた。

喉が、哽れている？

俯いていた顔をいきなり上げると、目尻に溜まっていた涙が、オレンジ色の光を浴びてきらきらと光る。

そして、叫んだ。

「心配した！ しんっ、しんぱいしたっ！！」

一言目はまだしも、二言目は、またもしゃくりあげてイントネーションがおかしなことになっていた。

そこで、思い至った。

まさか、あれからずっと泣いて、泣いて泣いて泣いて、いつまでたっても帰って来ない自分を、探しに来たのか？ と。

広い王都の中を駆けまわり、叫んで、泣き叫んで。

歌が得意だと言っていた。だったら、喉は、大事なはずなのに。嗟らしてまで、自分のことを、探してくれた。

「ご、ごめえ、ごめんなさいっ！ 偉そうに、いちゃって、ごめんな、さあいつ！？ いのち、たすけてもらた、のにイ、え、えら、えらそうに言っちゃってえ、ごめえ！？」

しゃくりあげて、泣くのを我慢しながら、泣いている。

必死に、笑おうとして、泣いていた。

「これ、これからはあ、ちゃん、ちゃんとするから、もう、ひと、一人にしない、で！」

裏切られたのだという。

何も知らない少女は、何も知らないままに、裏切られたのだという。

そんな少女の前に一人の少年が現れて、助けてくれた。

何も知らない少女と、一緒にいてくれた。

笑って、冗談を言い合って、全部、受け止めてくれた。

そんな少年が、つい、カッとなって言ってしまった言葉の所為で、いなくなってしまった。

もう、帰って来ないんじゃないのか？

また、一人になってしまふのだろうか？

僕は――、

「ほら、帰るぞ、ルル」

――相も変わらず、僕は、気づくのが遅い。

慰めの言葉もなにも送らず、ただ、手だけを伸ばした。

ルルはその、ともすれば頼りなさ気な細い手を見つけて、更に泣いた。オレンジ色に染まる王都の一角に尻もちをつき、もっと泣いた。

少女の思いなんてものは正確には分からないが、ただ一つだけ言えることがある。

少女の抱いていたソレは、紛れもない、――初恋だった。

第七話：気づいて、気づかされて、気づかせて（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955x/>

神殺し～優しい殺神鬼～

2011年11月18日01時07分発行